

松井二郎による
ソーシャルワーク論を思い起こす
——システム理論・レジリエンス思考・
構造－批判モデルに引き寄せて——

中 村 和 彦

松井二郎によるソーシャルワーク論を思い起こす ——システム理論・レジリエンス思考・構造－批判モデルに引き寄せて——

中 村 和 彦

Kazuhiko NAKAMURA

目次

1. はじめに：本稿の目的
2. 松井の研究業績：ソーシャルワーク論の位置
3. 松井ソーシャルワーク論の要点
4. ソーシャルワーク理論精緻化への示唆
5. おわりに：今後の課題

[Abstract]

Recalling the Theory of Social Work by Jiro Matsui: Attracting Systems Theory, Resilience Thinking, and Structural-critical Model

Jiro Matsui is leading social welfare theorist in the field of Japanese social welfare. He has also made in North American social work research and on the common foundations of social work practice. This paper; first, positions social work theory within Matsui's research achievements. It then organizes the main elements of Matsui's social work theory and constructs underlying concept of a new general social work practice theory. In addition, the paper will explore pointers obtained from Matsui's theory of social work from the perspectives of systems theory, resilience thinking, and structural-critical model.

1. はじめに：本稿の目的

本稿の一大目的は、松井二郎の研究業績、中でも、「ソーシャルワーク論」に関する業績に光をあて、その要点をあぶり出し、今後のソーシャルワーク理論構築に向けた示唆を得ることにある^{註1)}。

松井の研究業績を振り返るとき、おそらく多くの者が、1992年にミネルヴァ書房から公刊された『社会福祉理論の再検討』を、代表的業績として挙げるであろう。松井は学界において、社会福祉理論、社会福祉原論、福祉

国家論を中心とした研究課題を追究した研究者として理解されている。

松井は大学院修士課程で社会福祉学を修めた後、札幌市に所在する救護施設に指導主事として勤務した。その後1965年、当時の北星学園大学文学部社会福祉学科に助手^{註2)}として着任し教育研究者としてのキャリアをスタートさせた^{註3)}。

表1は、松井の主要な業績を年代順に並べたものである^{註3)}。松井は、北星学園大学の紀要である『北星論集』において継続的な業績の積み重ねをおこなってきたことがわか

キーワード：松井二郎，システム理論，レジリエンス思考，構造－批判モデル
Key words：Jiro Matsui, Systems Theory, Resilience Thinking, Structural-critical Model

表1 松井二郎の主な研究業績

| 発行年 | 北星論集 | 研究誌 | 編著書 |
|------|---|--|---|
| 1966 | 社会福祉施設の組織構造—社会福祉施設管理＝経営論の批判的検討 (3, 99-124) | | |
| 1967 | 社会福祉施設の組織分析—特に官僚制と専門職業の闘争の分析 (4, 29-52) | | |
| 1970 | 福祉事務所における職員の評価志向の問題—特に官僚制との関連について (7, 45-87, 忍博次との共著) | | |
| 1971 | ヴェーバー宗教社会学における慈善の合理的「経営」(Betrieb)の成立と禁欲的プロテスタンティズムの倫理 (8, 59-87) | 社会福祉行政と施設の管理・運営をめぐる諸問題 (社会福祉研究, 9, 41-47) | |
| 1973 | ヴェーバー宗教社会学におけるアジア宗教と慈善 (10, 169-183) | | |
| 1974 | アメリカ ソーシャル・ワーク理論の最近の動向 (11, 51-77) | | |
| 1975 | 社会福祉, ソーシャル・ワークの情報—資源処理パラダイム—福祉社会学試論 (13, 117-146, 米本秀仁と共著) | | |
| 1976 | ソーシャル・ワーク実践の共通基盤を求めて (14, 35-63) | | |
| 1977 | ソーシャル・ワーカー論—哲学的基盤を求めて (15, 15-38) | 社会福祉とシステム論—米国ソーシャル・ワーク理論のわが国への導入をめぐる (社会福祉研究, 20, 10-15) | |
| 1978 | 福祉社会学の構想 (I) —福祉と構造機能分析 (16, 1-35) | | |
| 1979 | 福祉社会学の構想 (II) —福祉と構造機能分析 (17, 155-190) | | |
| 1981 | 福祉社会学の構想 (III) —福祉と構造機能分析 (18, 85-119) | | 社会福祉実践の原理 (仲村・松井編著, 社会福祉実践の基礎, 有斐閣, 13-51) |
| 1982 | ウェーバーの福祉国家論 (19, 71-90) | 社会福祉理論の体系化をめざして (社会福祉研究, 31, 8-13) | |
| 1985 | | | 社会システム論と社会福祉理論 (野坂・秋山編著, 社会福祉方法論講座 II 共通基盤, 誠信書房, 53-85) 施設ケアの実践綱領—英国の社会福祉施設運営基準 (翻訳, 響文社) |
| 1986 | Residential Care and the Training and Qualification of Social Workers in Britain and Japan: Some Comparisons. (23, 225-244) | | |
| 1989 | | 英国における施設ケアの動向 (ソーシャルワーク研究, Vol. 15 No. 2, 87-94) | |
| 1990 | 転換期における社会福祉理論—機能分析の整理に向けて (27, 39-72) | | |
| 1992 | | | 社会福祉理論の再検討 (ミネルヴァ書房) |
| 1994 | | 福祉国家の存立構造と分析視角 (季刊社会保障研究, 30 (2), 118-128) | |

る。加えて要所で、研究誌や編著書で研究成果を公表してきた。本稿は中でも、直接的に「ソーシャルワーク」について論究された業績を対象とし言及することにした。

2. 松井の研究業績：ソーシャルワーク論の位置

ここでは、松井が積上げてきた業績を簡単に振り返りつつ、ソーシャルワークに関する論究の位置づけをおこないたい。改めて表1内の網掛けを施し、かつ太字で記載した業績

が、直接的にソーシャルワークについて論究したものであると考えられる。

その上で、図1は、1960年代から2000年代への時間的経過の中で、松井の経歴、思考の基盤あるいは、中心となった理論や枠組み等と、研究焦点・研究課題を大胆に付置したものである。ここでは研究焦点・研究課題を①から⑥へと至る流れとしてとらえている。①は、社会福祉施設の組織構造や管理・運営、あるいは専門職業性や価値志向等についてまとめたいくつかの論考が該当する(松井1966, 1967, 1971b, 忍・松井1970)。これらの論究の基盤におかれた鍵概念をひとつあげ

松井二郎によるソーシャルワーク論を思い起こす

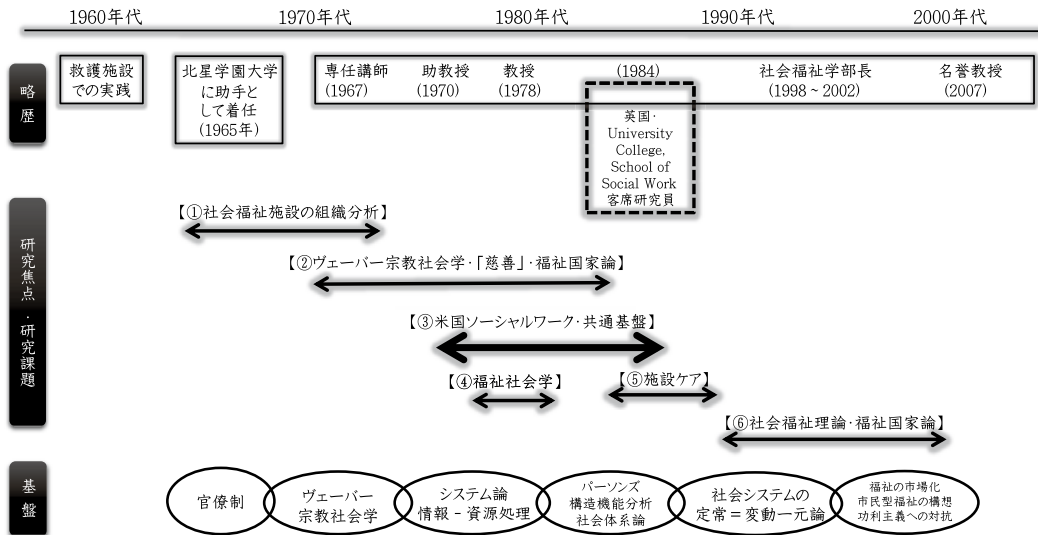


図1 松井二郎による研究の焦点・課題・基盤

るとするならば、それは「官僚制」であり、おそらくは救護施設での実践経験から触発された研究関心であろう。

続く②は、M. ヴェーバー研究である。「ヴェーバー宗教社会学」, 禁欲的プロテスタンティズムの倫理を下敷きに、「慈善」に焦点化した論述 (松井1971a, 1973), その後の「福祉国家論」(松井1982a)へと継続される。もとよりM. ヴェーバーへの傾注は、福祉社会学構想や社会福祉理論研究においても活かされることとなり、松井にとって理論的支柱となっていると考えられる。

そして③の「松井ソーシャルワーク論」へと移行するわけであるが、その内容は後述することとし、④は北星論集に連続して掲載された「福祉社会学の構想」の成果である (松井1978, 1979, 1981a)。M. ヴェーバー研究から北米ソーシャルワーク研究, ソーシャルワークの共通基盤の探究を経て、特に、T. パーソンズによる構造機能分析や社会体系論に立脚しながら、あるべき福祉社会学を骨太に構想した。この一連の論稿は、後半の社会福祉理論研究に繋がる重要なものであったととらえることができる。

その後の松井は、1984年7月から1985年3月までの9ヶ月間、英国で在外研究をおこなった。この在外研究期間での取り組みが、その後の松井の研究者としての立ち位置を確実なものとし、いまでもなお、誰もが無視することができない業績をあげた⑥社会福祉理論研究・福祉国家論研究に結実したものと考えられる。帰国後松井は1985年に、英国の保健・社会保障省による『施設ケアの実践綱領－英国の社会福祉施設運営基準』を響文社から翻訳出版するとともに、⑤にあたる英国における施設ケアの動向についての複数の論文を発表している (松井1986, 1989aなど)。これらの取り組みには、英国での在外研究期間に見聞した Residential Care の実状、日本での入所施設ケアからコミュニティ・ケアへの転換、初めてのソーシャルワーカー国家資格の誕生等への松井の思いや、若い頃の救護施設での厳しい体験等が反映されたものと思われる。

そして1990年代以降、⑥社会福祉理論・福祉国家論研究を精力的におこない、1992年、ミネルヴァ書房より公刊された骨太で至上的な『社会福祉理論の再検討』をはじめとした

業績へと実を結ぶことになる(松井1990, 1992, 1994bなど)。繰り返しになるが英国での在外研究, Ramesh Misra 教授との出会い, Welfare State, Social Policy, Globalization等をめぐる議論と摂取が原動力となり、「社会システムの定常=変動一元論」の提示, そして「福祉の市場化(アイデンティティ問題)」「市民型福祉の構想」「功利主義への対抗の必要性」という社会福祉理論研究をめぐる三つの課題の確認とそれへの応答努力等により松井は、日本における社会福祉研究学界の泰斗としての地位を確立するに至った^{註4)}。

さて本稿の目的は、松井による「ソーシャルワーク論」の検討にある。そこで松井の研究業績では③にあたる米国ソーシャルワーク及び、ソーシャルワークの共通基盤にかかる論究であるが、改めて表1及び、図1を確認してみると、ソーシャルワークに関する一連の業績群は「中間」に位置付いているようにみえる。松井ソーシャルワーク論についてはその内容を、次節において記すことにするが、1974年から4年間、『北星論集』に連続して掲載された論文(松井1974, 1976, 1977b, 松井・米本1975)^{註5)}や専門雑誌『社会福祉研究』で発表した「社会福祉とシステム論—米国ソーシャル・ワーク理論のわが国への導入をめぐる」(松井1977a), そして1981年、有斐閣が企画した『講座 社会福祉』の第4巻『社会福祉実践の基礎』(仲村優一との共同編集)の第1章として、これまで積み重ねてきた内容を整理、まとめるに至った「社会福祉の原理」(松井1981c)が中核となる業績である。

その後松井は、1982年に『社会福祉研究』に、「社会福祉理論の体系化をめざして」(松井1982b), 英国での在外研究から帰国した年、誠信書房が企画した『社会福祉方法論講座』の『II 共通基盤』に「社会システムと社会福祉理論」を発表する(松井1985)。それらの内容はタイトルが示すように、社会福祉理論にウエイトがおかれた論究となっている。

しかしながら、研究関心を、ソーシャルワーク研究から社会福祉理論研究に大きく方向転換させたというより、先述した④福祉社会学構想の論考内容とも合わせ、漸次的に移行しているように感じられる。グランドセオリーのひとつであり、ソーシャルワークに積極的に摂取された「システム論」、吉田民人らによる社会学の重要な成果から着想を得た「情報—資源処理パラダイム」、T. パーソンズによる「構造機能分析」「社会体系論」等々を貪欲に採り入れ、思索の基盤の幅を広げ確実なものにしていったといえる。

3. 松井ソーシャルワーク論の要点

前節では、松井の研究成果の流れを踏まえ、その上で、ソーシャルワーク論の位置を考えてみたが、本節では、松井によるソーシャルワーク論の要点について整理することにした。ところで松井はソーシャルワークを次のように定義する(松井1985: 83)。

ソーシャル・ワーク実践とは、人びとが課題に遭遇し、課題を達成することが困難な場合、①人びとの対処能力を高めることによって、②人びとを社会的資源に結びつけることによって、③社会的諸資源を改善・整備することによって、人びとと人びとをとりまく環境システムとの交互作用の場に対抗的相補性の回復・増進をはかり、人びとが課題を自律的に達成しうるよう援助する活動である。^{註6)}

また松井は、上記の定義を解説する意図から、ソーシャルワーク実践について次のように解説する(松井1985: 83)。

ソーシャル・ワーク実践とは、人びとが課題達成の困難に直面した場合、課題達成に向けての人びとの情報—資源処理プロセスに、いいかえれば、課題解決のための人びとの社

会的学習過程に焦点をおきながら、人びとの主体的能力ともいうべき情報-資源処理能力（対処能力）と、人びとをとりまく資源の布置状況（市場的および非市場的資源配分機構によって配分される財・サービス、およびその他のインフォーマルな諸資源を一括した意味で、環境システムと呼ぶことができる）との間に、新たな、より生産的な関係（対抗的相補性的な関係）を創出していくことによって、人びとが課題を自律的に達成しうるように援助することを目的とした実践といえよう。

これらふたつのソーシャルワークに関する松井による定義や解説を注意深く読むことにより、松井ソーシャルワーク論の要点を確認することができるが、課題に遭遇した人びとが、その課題を達成するのに困難を抱えているという「前提」、人びとがそれら課題を自律的に達成しうるように援助するという「目的」、人びとと人びとをとりまく環境システムとの相互作用の場に対抗的相補性的な回復・増進を図る（人びとの情報-資源処理能力・対処能力と、環境システムとの間での新たな

生産的な関係の創出）という「目標」、そして、それらを実現するための三方向・三焦点の「方法」から構成されている。図2は筆者による、ソーシャルワーク理論における「バイオ・サイコ・ソーシャルモデル」、[マイクロ・メゾ・マクロ領域]を組み込み、人と環境の相互作用を基盤としたソーシャルワーク実践を表した改訂最新版である。詳細解説は別稿に譲ることにしたいが（中村2017, 2020等）、松井によるソーシャルワークの要点、特に、三方向の実践展開を色濃く反映させたものであり、図2内の右下、ソーシャルワーカーを起点としている3本の矢印が、松井の三方向・三焦点の「方法」と対応している。

加えて図3は、松井がソーシャルワーク論から社会福祉理論研究へと徐々に軸足を移行する際の鍵概念になった「社会システムの定常-変動一元論モデル」を表したものである。松井によれば、①社会システムの構造矛盾が、②社会システムの要件不充足を引きおこし、それが③特定の範囲の人びとの生活システム、人びとの生活現場の緊張と、④生活要件・欲求の不充足へと収斂していく過程を

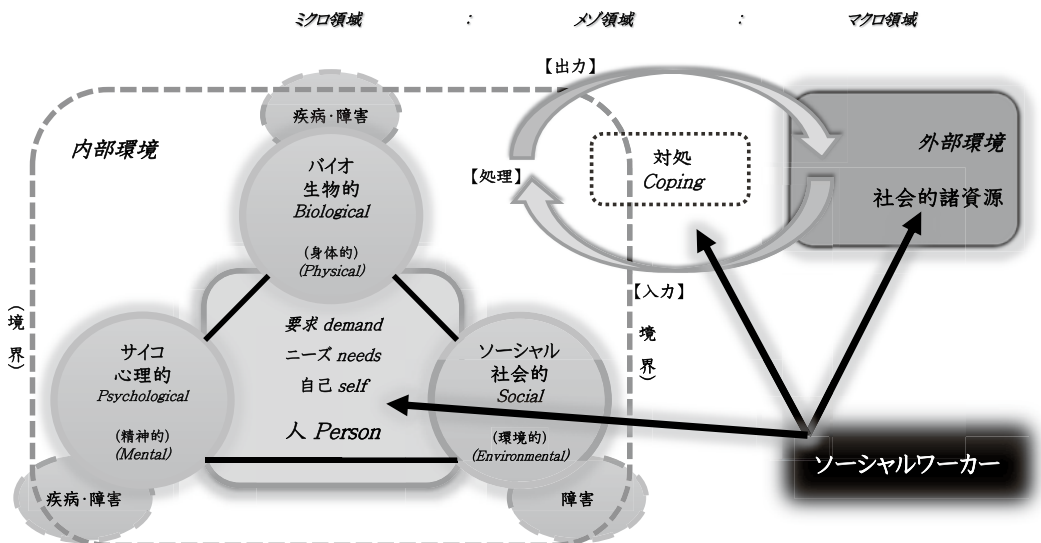


図2 人と環境の相互作用を基盤としたソーシャルワーク実践

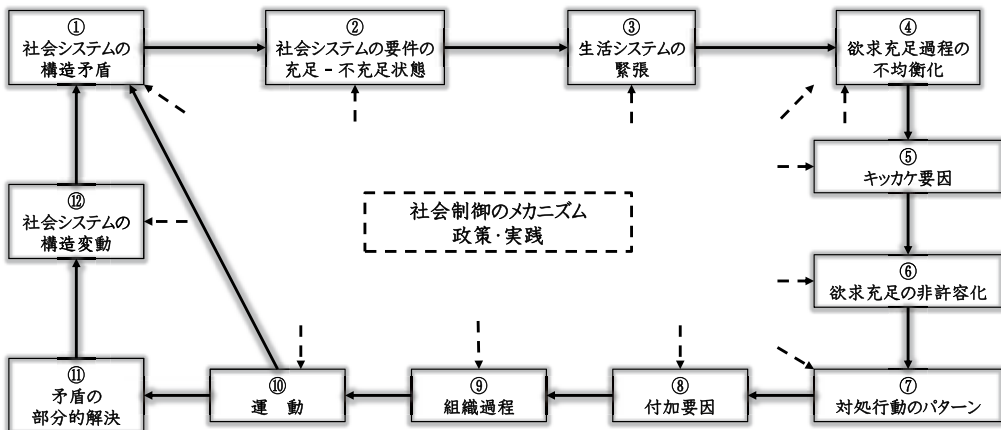


図3 社会システムの定常-変動一元論モデル (松井 1985 : 57 を一部改変)

描くことができる (松井1981c : 21)。

その後がまさにソーシャルワークの直接的課題に繋がることになるが、⑤人びとのライフサイクルにおける「発達課題 developmental stages」と人びとが遭遇する「ライフ・イベント life events」(さまざまな困難なできごと、状況の急変)という「キッカケ要因」が付け加わることにより、社会システムの構造的矛盾と相まって、人びとの日常生活における欲求不充足状態がより顕在化していく (松井1981c : 28)。つまりソーシャルワーク支援の具体的対象となり得る生活課題が立ち現れるのである。その状態は、人びとの「対処能力 coping capacity」(日常時、平常時の情報-資源処理パターン)を上回る「ストレス」を抱えた状態であり、人びとは「危機 crisis」状態に晒されている (松井1981c : 33)。それ故にソーシャルワークは、④人びとの対処能力を高めること、⑩人びとを社会的資源に結びつけること、①社会的諸資源を改善・整備することという三方向・三焦点のやり方・方法により実践を展開することになる。これらが、松井ソーシャルワーク論の主眼となろう。

4. ソーシャルワーク理論精緻化への示唆

本節では、これからのソーシャルワーク理論の精緻化に向けて、松井が考究したソーシャルワーク論が示唆するものについて、①システム理論、②レジリエンス思考、③構造-批判モデルの三点から考えてみることにしたい。ところで筆者は、ソーシャルワーク実践理論、メンタルヘルス・ソーシャルワークを専門とする者として、昨今は、レジリエンス思考 Resilience Thinking を基にしたソーシャルワーク実践の実証研究とともに、ソーシャルワーク実践理論の構築に取り組んできている (中村2017, 2020など)。

目下のところ筆者によるソーシャルワークの定義は次のようなものである。

ソーシャルワークとは、利用者(クライアント)と専門支援者(ソーシャルワーカー)との参加と協働のもと、利用者の自己決定過程を最大限保障したうえで、利用者自らが、生活上の課題解決、社会的機能の改善・維持・向上、外部環境への対処能力の向上を図るよう支援し、他方で、社会環境への介入をお

こない、さらには社会構造の変革を意図し、生活継続のための条件整備として、社会福祉・社会保障にかかる制度・政策、具体的サービスの維持・向上・創出を実現する、その時点における利用者の最善の利益を確保・獲得する過程展開である。

やや長い定義になってはいるが、ソーシャルワークの一大特性である「過程」を重視したものであり、ミクロ実践とマクロ実践の双方を強調した、種々の課題を解決に導こうとする過程展開を主張している。この定義を注意深く検討していただければ、対処能力の向上や社会環境への介入、社会構造の変革等の点において、松井によるソーシャルワーク論が色濃く反映されていることに気づくであろう。

①システム理論 ソーシャルワークの発展において、システム理論が多大な貢献をしたことに疑いの余地はない。1980年代に生態学理論 Ecology、生活モデル Life Model が C. ジャーメインらによって展開され、ソーシャルワークは大きな花を咲かせることとなり、1990年代には、C. メイヤーらによって、エコシステム視座 Eco-systems Perspective が提唱され応用展開が可能となった。それらの潮流も、1970年代に、H. ゴールドシュタインや、ピンカスとミナハンらによって、フォン・ベルタランフィーによる一般システム理論 General System Theory (ベルタランフィー 1973, デーヴィッドソン 2000) が積極的に採り入れられた結果といえる。また現在多くみられるような「包括性」「統合性」「全体性」がソーシャルワークの中で論じられるのもシステム理論の貢献によるものである。

その上で、松井ソーシャルワーク論とシステム論との関係であるが、松井のソーシャルワークに関する論考のスタートはシステム理論を積極的に摂取した米国ソーシャルワーク

の検討からはじまっている。当時、「ソーシャル・ワーク実践に関する掘り下げた研究と共通した認識が欠如している」(松井1974: 53) 状況を考慮し、米国ソーシャルワークから学ぶ強い意義があったものと推察される。またその後の論究において、「情報-資源処理過程」や「構造機能分析」、「社会体系論」や「社会システムの定常-変動一元論モデル」等々の鍵概念が用いられるが、それぞれに通底するのは、まさにシステム論であるといえる。

昨今のソーシャルワーク実践理論動向に目を向けた際、ポストモダン思想や社会構成主義、ナラティブの重視等、一見するとシステム論とは対抗する鍵概念や視角の台頭も見受けられる。松井によるソーシャルワーク論を再検討するにつけ、改めて、ソーシャルワーク理論におけるシステム理論の位置づけや意味について再検討する必要性が強く示唆される。

②レジリエンス思考 東日本大震災以降、Resilience は、さまざまな分野・領域で取り上げられるようになり、研究書や研究論文、how to 本や大衆雑誌等々、夥しい数の出版が確認でき、一種の流行語とさえいえる。他方、日本のソーシャルワークの研究・教育・実践領域での蓄積は極めて少ない状況にあるといえる。

元々、物理学用語であったレジリエンスは一般に「跳ね返す力」「回復力」等と理解されている。レジリエンスとソーシャルワーク実践に関する研究成果については、レジリエンスを「再起力」ととらえ、そう遠くない時期に出版する予定にしており、詳細はそちらに譲ることにしたいが、ウォーカーとソルト (2020: v) は、「システムが攪乱を吸収しながらも基本的な機能と構造を維持する能力」と説明し、A. マステン (2020: 26) は、「自らの機能、存続または発達を脅かす

ものに適応する、動的システムのキャパシテイ」と定義している。またソーシャルワークにおけるレジリエンス研究の第一人者である M. ウンガーは次のように説明する (M. Ungar 2008)。

レジリエンスとはその人にとって、重い逆境、重大な困難・難事 (*adversity*) が表れるなかで、個人の心理的、社会的、文化的、身体的、物的資源から本人に作用するものを探し出し (*navigate*)、順調な生活 (*well-being*) を維持する能力であるとともに、これらの資源が文化的に本人にとって意味ある方法で提供され、利用できるように交渉する (*negotiate*) 個的・集会的な能力のことである。

そこでソーシャルワークの文脈において Resilience をどのようにとらえるのか、目下のところ、その要点を以下のようにまとめておきたい。

- レジリエンスは、パーソナル・レジリエンスとコミュニティ・レジリエンスの双方から構成される。
- レジリエンスの反対概念は、脆弱性 (*vulnerability*) である。
- レジリエンスとは、人びとが難事、難局、アドバーシティ (*adversity*) に遭遇した際に、それを乗り越え、新たな生活を構築することである。
- レジリエンスを考える際、リスク要因と保護要因の双方を常に考慮に入れる必要がある。
- レジリエンスは個人にあっては「特性」として理解され、難事・難局時に発揮されるものであり、平常時・日常時にあってはレジリエンスを育む取り組みや支援が必要である。
- 個人の特性としてのレジリエンスの発揮には、コミュニティ・レジリエンス、コミ

ュニティ資源が大きく関係しており、平常時・日常時に、コミュニティ・レジリエンスを育む取り組みが肝要である。

- 「特性」としてのレジリエンスを理解するとともに、如何に逆境を乗り越え、新たな段階に前進することを強調する際には、「現象」、「過程」としてのレジリエンスが重要となる。

松井はソーシャルワークの検討を進めていく際に、当然のことながら Resilience に直接言及してはいない。しかしながら、先述したように、人びとの生活に危機をもたらし、日常生活において直面する欲求の不充足状態を逆機能として促進してしまう際の「キッカケ要因」として人びとが遭遇するライフ・イベントをあげた。人びとが危機をもたらすライフ・イベント、さまざまな困難なできごと、状況の急変により人びとは「苦悩、絶望、挫折を体験」し、「人びとの情報-資源処理パターンの連続性をゆるがし不均衡状態を引きおこす」(松井1981c: 33) ことを強調している。これらの言及は、難事・難局・逆境の遭遇と Resilience との関係性を物語っているように受け取ることができる。今後は、松井ソーシャルワーク論とレジリエンス思考との関係性を考察していくことは重要なことのように思われる。

③構造-批判モデル 筆者はこれまでソーシャルワークを考える際、「ソーシャルワーク論」「ソーシャルワーク方法論」「ソーシャルワーク実践理論」の峻別理解を強調し、個別・具体・特殊な生活課題を解決に導くための「道具立て」としての「ソーシャルワーク実践理論」を、「実践モデル」と「アプローチ」から説明してきた。その上で「実践モデル」について、図4に示すように4つのモデル構成を主張してきた (中村 2017, 2020)。

そして新しい第4のモデルである「構造-

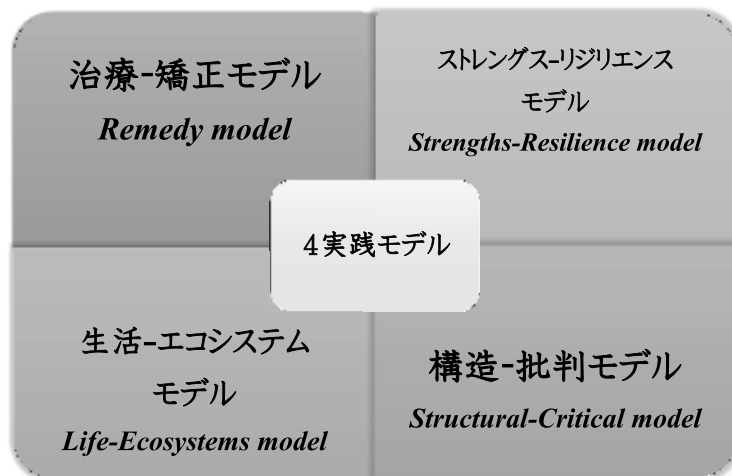


図4 ソーシャルワーク実践理論における新しい4実践モデル構想

批判モデル」を、人びとの生活問題・生活課題を産出している社会の「構造」に焦点を当て、批判的な検討を加えるなかで、社会問題 Social Problem の把握に努め、社会病理をよく理解し、社会構造の変革を積極的に思考する実践展開につなげるものとして説明してきた。それは現在、まさに必要とされているマクロ・ソーシャルワーク、マクロ実践、ソーシャル・アクション等を志向しているといえる。そこで、この観点から、松井によるソーシャルワークを考えてみたい。

すでに触れてきたように、松井によるソーシャルワーク実践の対象者（生活者）は、ライフサイクルにおける「発達課題」と人びとが遭遇する困難なできごと、状況の急変としての「ライフ・イベント」からなる「キッカケ要因」により日常生活における欲求不充足状態に陥り、生活課題が複雑化することになる。しかしながら、その大前提、出発点には「社会システムの構造的矛盾」が存することが強調されている。その構造的矛盾は、人びとの生活システムに緊張をうみ、人びとの生活過程と生活構造に緊張をもたらすことになる。

社会システムの構造的矛盾が結果として、人びとの不平等を算出するのである（松井

1981c）。その意味からいってソーシャルワークには、社会環境への介入、社会構造の変革、制度・政策・具体的サービスの維持・向上・創出を確実に展開していかなければならない。松井ソーシャルワーク論は、まさに現在求められている今後の新たなソーシャルワークのあり方に重要な示唆を提供してくれる。もとより松井には「学問的営為において共通するものとして『批判的思考』（批判的視点）」（伊藤2018：165）が貫かれており、その点も肝に銘じ、ソーシャルワーク理論の精緻化にあたらなければならないであろう。

5. おわりに：今後の課題

本稿執筆の着想は4年ほど前であったが、改めて取り組んでみて、松井によるソーシャルワーク論には、今後不可欠なソーシャルワーク理論精緻化への示唆が多いことを知ることになった。

社会福祉理論研究の領域で著名となった松井が、米国ソーシャルワーク論の検討にはじまるソーシャルワーク研究に継続的に取り組んでいたことを知る者は必ずしも多いとはいえない。そのような中、本稿では、松井によ

るソーシャルワーク論の位置づけ、要点の整理、そして、今後のソーシャルワーク理論精緻化に向けた示唆について触れてきた。しかしながら極めて表層的な整理に終始してしまったことは否めない。

松井は、「社会システムの定常－変動一元論モデル」の重要性を説き、「社会福祉政策」と「ソーシャルワーク実践」、そして「運動」を論理的かつ首尾一貫した形で相互連関的に付置していくことにチャレンジしていた(松井 1982b)。今後は、ソーシャルワーク理論精緻化の視点から、社会システムの構造的矛盾への対応、「運動」の理論的かつ実践的位置づけを進めていかなければならないであろう。加えて松井はソーシャルワーク実践の「断片化」、「タコツボ化」を非常に危惧していた。言い換えるならば、一連の実践過程の「分断化」、「支援の切り売り現象」とも言え、まさに現在のソーシャルワークが抱え、山積みとなっている課題である。その意味では、「Social Actionist」(松井 1974)としてのソーシャルワーカーの役割についても追究していかなければならない喫緊の課題があるように思えてならない。

註

- 1)本稿は、一昨年にご逝去された永田勝彦北星学園大学名誉教授の追悼号となる『北星論集』(北星学園大学社会福祉学部)第58号に掲載されている。松井二郎先生がご逝去され4年の月日が流れた。本来は、松井先生の追悼号であった『北星論集』第55号掲載に向けて本稿は準備していたが実現できなかった。北星学園大学大学院文学研究科社会福祉学専攻修士課程において両先生から薫陶を受けた筆者としては感慨深く、寂寞の感を禁じ得ない。
- 2)詳細は忘却の彼方であるが、教育研究者としてのスタートが助手としての2年間であったことは、幸福なことといえと直接うかがったことを思い出す。
- 3)松井二郎先生のご略歴、学会および社会における活動、研究業績については、北星学園大学社

会福祉学部(2018)『北星論集』第55号に詳しい。

- 4)松井による社会福祉理論研究についての評価は伊藤(2018)を参照。なお本稿図1にも示した社会福祉理論研究をめぐる課題については、伊藤による検討内容を採りいれている。
- 5)1975年発表した論文「社会福祉、ソーシャル・ワークの情報－資源処理パラダイム－福祉社会学試論」は米本秀仁との共著である。米本は、北星学園大学を卒業後、首都圏の大学院修士課程で社会福祉学を修め、教育研究者としてのキャリアをスタートする前、特別養護老人ホームに指導員として勤務した。当該論文も指導員時代のものである。松井は米国ソーシャルワークの動向について論述する際、米本への謝辞を記すことがあり、松井の研究に影響を与えたことがうかがえる。
- 6)筆者は、学部や大学院において、ソーシャルワーク実践理論を講じているが、この松井による定義は、ソーシャルワーク実践の要点を解説するうえで、極めて明快なものと判断され、現在においても必ず紹介している。

文献

- ベルタランフィ、フォン／長野敬・太田邦昌訳(1973)『一般システム—その基礎・発展・応用』みすず書房。(=1968, Ludwin von Bertalanffy., *General System Theory: Foundations, Development, Applications*. George Braziller.)
- デーヴィッドソン, M. / 鞠子英雄・酒井孝正訳(2000)『越境する巨人 ベルタランフィ—一般システム理論入門』海鳴社。(=1983, Mark Davidson., *Uncommon Sense: The Life and Thought of Ludwin von Bertalanffy, Father of general Systems Theory*. J. P. Tarcher)
- 英国・保健社会保障省高齢問題政策センター／松井二郎訳(1985)『施設ケアの実践綱領』響文社。(=1984, *Home Life: A Code of Practice for Residential Care*. Centre for Policy on Aging)
- 伊藤新一郎(2018)「松井二郎による社会福祉理論研究の再検討—その特徴・限界・現代的意義」『北星論集』北星学園大学社会福祉学部, 第55号, 157-171頁。
- マステン, アン／上山真知子・J.F. モリス訳(2020)『発達とレジリエンス—暮らしに宿る魔法の力』明石書店。(=2014, Ann S. Masten. *Ordinary Magic: Resilience in Development*. Guilford Press.)

- 松井二郎 (1966) 「社会福祉施設の組織構造—社会福祉施設管理＝経営論の批判的検討」『北星論集』北星学園大学, 第3号, 99-124頁.
- 松井二郎 (1967) 「社会福祉施設の組織分析—特に官僚制と専門職業の闘争の分析」『北星論集』北星学園大学, 第4号, 29-52頁.
- 松井二郎 (1971a) 「ヴェーバー宗教社会学における慈善の合理的『経営』(Betrieb)の成立と禁欲的プロテスタンティズムの倫理」『北星論集』北星学園大学, 第8号, 59-87頁.
- 松井二郎 (1971b) 「社会福祉行政と施設の管理・運営をめぐる諸問題」『社会福祉研究』財団法人鉄道弘済会, No.9, 41-47頁.
- 松井二郎 (1973) 「ヴェーバー宗教社会学におけるアジア宗教と慈善」『北星論集』北星学園大学, 第10号, 169-183頁.
- 松井二郎 (1974) 「アメリカ ソーシャル・ワーク理論の最近の動向」『北星論集』北星学園大学, 第11号, 51-77頁.
- 松井二郎 (1976) 「ソーシャル・ワーク実践の共通基盤を求めて」『北星論集』北星学園大学, 第14号, 35-63頁.
- 松井二郎 (1977a) 「社会福祉とシステム論—米国ソーシャル・ワーク理論のわが国への導入をめぐる」『社会福祉研究』財団法人鉄道弘済会, No.20, 10-15頁.
- 松井二郎 (1977b) 「ソーシャル・ワーカー論—哲学的基盤を求めて」『北星論集』北星学園大学, 第15号, 15-31頁.
- 松井二郎 (1978) 「福祉社会学の構想 (I) —福祉と構造機能分析」『北星論集』北星学園大学, 第16号, 1-35頁.
- 松井二郎 (1979) 「福祉社会学の構想 (II) —福祉と構造機能分析」『北星論集』北星学園大学, 第17号, 155-190頁.
- 松井二郎 (1981a) 「福祉社会学の構想 (III) —福祉と構造機能分析」『北星論集』北星学園大学, 第16号, 85-119頁.
- 松井二郎 (1981b) 「書評 嶋田啓一郎著『社会福祉体系論』」『社会福祉研究』財団法人鉄道弘済会, No.28, 90-91頁.
- 松井二郎 (1981c) 「第1章 社会福祉実践の原理」仲村優一・松井二郎編著『社会福祉実践の基礎 (講座社会福祉第4巻)』有斐閣, 13-51頁.
- 松井二郎 (1982a) 「ウェーバーの福祉国家論」『北星論集』北星学園大学, 第19号, 71-90頁.
- 松井二郎 (1982b) 「社会福祉理論の体系化をめざして—諸理論の検討」『社会福祉研究』財団法人鉄道弘済会, No.30, 8-13頁.
- 松井二郎 (1985) 「第3章 社会システム論と社会福祉理論」野坂勉・秋山智久編著『社会福祉方法論講座 II 共通基盤』誠信書房, 53-85頁.
- 松井二郎 (1986) 「Residential Care and the Training and Qualification of Social Workers in Britain and Japan: Some Comparisons」『北星論集』北星学園大学文学部, 第23号, 225-244頁.
- 松井二郎 (1989a) 「英国における施設ケア論の動向」『ソーシャルワーク研究』Vol. 15 No. 2, 87-94頁.
- 松井二郎 (1989b) 「書評 福祉士養成講座編集委員会編『社会福祉士養成講座』全15巻」『社会福祉研究』財団法人鉄道弘済会, No.46, 106-107頁.
- 松井二郎 (1990) 「転換期における社会福祉理論—機能分析の整理に向けて」『北星論集』北星学園大学文学部, 第27号, 39-72頁.
- 松井二郎 (1992) 『社会福祉理論の再検討』ミネルヴァ書房.
- 松井二郎 (1994a) 『社会福祉施設の人材確保に関する実態調査報告書』社会福祉法人北海道社会福祉協議会.
- 松井二郎 (1994b) 「福祉国家の存立構造と分析視角」『季刊社会保障研究』30 (2), 118-128頁.
- 松井二郎 (2005) 「書評 高田眞治著『社会福祉内発的発展論—これからの社会福祉原論』」『社会福祉学』45 (3), 79-83頁.
- 松井二郎・米本秀仁 (1975) 「社会福祉, ソーシャル・ワークの情報—資源処理パラダイム—福祉社会学試論」『北星論集』北星学園大学, 第13号, 117-146頁.
- 中村和彦 (2017) 「ソーシャルワーク実践理論再構成への素描—『構造—批判モデル』の導入と養成教育における具体的展開を構想して」『北星論集』北星学園大学社会福祉学部, 第54号, 32-47頁.
- 中村和彦 (2020) 「ソーシャルワーク実践理論の整備に向けたスケッチ—実践モデル・アプローチ・支援スキルの現在」『北星論集』北星学園大学社会福祉学部, 第57号, 162-181頁.
- 忍博次・松井二郎 (1970) 「福祉事務所における職員の価値志向の問題—特に官僚制との関連について」『北星論集』北星学園大学, 第7号, 45-87頁.
- ティリッヒ, パウル/松井二郎訳(1977) 「ソーシャル・ワークの哲学」『北星論集』北星学園大学, 第15号, 32-38頁. (=1962, The Philosophy

of Social Work, *Social Service Review*, Vol. 36, No. 1)

Ungar, M. (2008). Resilience across cultures. *The British Journal of Social Work*, 38 (2), 218-235.

ウンガー, マイケル/秋山薊二監訳・中村和彦共訳 (2019) 「子ども・若者のレジリエンスに関連する要素と過程 (Factors and Processes Associated with Resilience among Children and Youth)」『ソーシャルワーク研究』Vol. 45, No. 3, 相川書房, 236-246頁.

ウォーカー, ブライアン., ソルト, デイヴィッド/黒川耕大訳 (2020) 『レジリエンス思考—変わりゆく環境と生きる』みすず書房. (= 2006, Brian Walker, David Salt. *Resilience Thinking: Sustaining Ecosystems and People in a Changing World*. Island Press.)